

【原 著】

「大1コンフュージョン」の実際（第1報）
—高校と大学のギャップに戸惑う新入生の実態調査—

原田 新 池谷 航介 松井 めぐみ 望月 直人

Study of “Confusion after the entrance to Higher Education” I
Investigation on “Confusion after the entrance to Higher Education”

Shin HARADA, Kosuke IKETANI, Megumi MATSUI, Naoto MOCHIZUKI

2018

岡山大学教師教育開発センター紀要 第8号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.8, March 2018

原 著

「大1コンフュージョン」の実際 (第1報) —高校と大学のギャップに戸惑う新入生の実態調査—

原田 新^{※1} 池谷 航介^{※1} 松井 めぐみ^{※1} 望月 直人^{※2}

本研究では、まず「高校までの学校段階と大学との様々なギャップに対し、多くの大学1回生が入学後に強い戸惑いや困難を感じることを「大1コンフュージョン」と命名した。その上で、予備調査では、大1コンフュージョン【大学生生活全般】31項目、大1コンフュージョン【一人暮らし】8項目を収集した。本調査では、それら39項目の平均値および、ASD（自閉スペクトラム症）困り感、ADHD（注意欠如・多動症）困り感との関連について検討した。平均値の結果から、大学1回生は、相対的に授業履修や学習面に対して戸惑いや困難が高く、学習面以外の大学生生活全般に対しては相対的に低い結果が示された。それに対し、発達障がい困り感との関連結果から、特にASD困り感の強い学生は、授業履修や学習面よりも、それ以外の大学生生活全般に対して、より戸惑いや困難を感じやすい結果が示された。

キーワード：大1コンフュージョン、発達障がい学生支援、高大接続、初年次教育

※1 岡山大学全学教育・学生支援機構学生総合支援センター

※2 大阪大学キャンパスライフ健康支援センター

I 問題と目的

教育現場において、「小学校に入学したばかりの小学校1年生が集団行動が取れない、授業中に座ってられない、話を聞かないなどの状態が数ヶ月継続する状態」（東京都教育委員会, 2004）を意味する「小1プロブレム」という概念が広まって久しい。その後、小学校から中学校への移行に伴う「中1ギャップ」や、中学校から高校への移行に伴う「高1クライシス」などの概念も提唱され、学校段階間の移行に伴う児童・生徒の不適応の問題が社会的に注目されている（渡邊・堤, 2017）。その一方、高校から大学への移行に伴う困難さについては、それらに対応するような用語が見られず、社会的な注目度もまだそれほど高くないといえる。

しかし、高校生活と大学生活の間にも、大きなギャップが存在する。まず、時間割作成における違い、ホームルームや担任教員の有無、連絡事項や重要情報の取得方法の違い、空き時間の過ごし方の違いなど、授業外での大きな違いがある。また、授業においても、大学では授業時間が長く、講義形式、ゼミ形式、実習・実験形式など多様な授業形態があること、講義ではあまり板書が行われず、教科書指定のない授業も多い為、ノートを取る際に工夫がいること、レポートや課題が多いこと、発表やプレゼンテーションをする場合があることなど、様々な点で高校までとの違いが存在する（世界思想社編集部, 2015；世界思想社教学社, 2010；専修大学出版企画委員会, 2009）。このような高校と大学との多様なギャップに対し、多くの大学1回生が強い戸惑いや困惑を感じる事が指摘されている（朝比奈, 2010；専修大学

出版企画委員会，2009；世界思想社教学社，2010）。さらに，「高等学校から大学への移行と適応過程に関する調査」では，大学1年次の6月に，学習面で5割強，対人関係面で3割弱，生活全般で3割強が適応できていない状態にあり，その4か月後の10月には学習面の不適応は4割強に減るものの，対人関係面や生活全般での不適応の割合は大きく変わらないという結果が示されている（濱名，2006）。

これらのギャップを埋め，高校から大学へと新入生をスムーズに移行させることを目的として，近年では約97%の大学で初年次教育が導入されている（文部科学省，2017）。初年次教育とは，「高等学校から大学への円滑な移行を図り，大学での学問的・社会的な諸条件を成功させるべく，主として大学新入生を対象に作られた総合的教育プログラム。高等学校までに習得しておくべき基礎学力の補完を目的とする補習教育とは異なり，新入生に最初に提供されることが強く意識されたもの。」（文部科学省，2017）を指す。文部科学省（2017）によると，平成27年度の時点で，6割を超える大学が「レポート・論文の書き方などの文章作法を身に付けるためのプログラム」（88.6%），「プレゼンテーションやディスカッション等の口頭発表の技法を身に付けるためのプログラム」（82.3%），「将来の職業生活や進路選択に対する動機付け・方向付けのためのプログラム」（77.6%），「学問や大学教育全般に対する動機付けのためのプログラム」（76.5%），「大学内の教育資源（図書館を含む）の活用方法を身に付けるためのプログラム」（75.9%），「論理的思考や問題発見・解決能力の向上のためのプログラム」（65.4%），「ノートの取り方に関するプログラム」（63.7%）を初年次教育として行っている。これらの調査結果から示されるように，近年の初年次教育では，主に大学での学びの前提・基礎となるアカデミック・リテラシーに類する教育が実施されており（吉岡，2013），新入生の学習面に関する高大接続のサポートは充実してきているといえる。しかし，大学に入学してきた新入生が戸惑いや困難を感じるのは，学習面のことに限らない。例えば大学では，入学時に知人がいない場合が多く，かつ高校までとは違ってクラスが無い為，友人を作る為には自ら積極的に話しかけることが求められる（世界思想社教学社，2010）。このような状況は，コミュニケーションの苦手な学生にとっては，非常に困難なものとなり得る。また，大学入学後に初めて一人暮らしを始めた新入生の中には，慣れない自炊や家事等で困っている者が一定数存在することは容易に想像できる。大学1年次の6月および10月時点で，対人関係や生活全般で上手く適応できない者が3割前後は存在する（濱名，2006）という結果からも，新入生にとって学習面以外にも多様な戸惑いや困難が存在することは明らかである。

ただし，実際に大学1年生が，学習面や対人関係面，生活面等，多様な場面・状況に対し，どの程度の戸惑いや困難を感じているのかについては，明らかにされていない。高校から大学への移行支援や，新入生の初期適応を促す支援を考える為には，新入生が実際にどのような場面・状況に対して，特に戸惑いや困難を感じやすいのかについて把握した上で，支援の内容や方法を考える必要があるであろう。

さらに，高校までの学校段階と大学とのギャップが，発達障がいのある学生の適応に大きな影響を与える場合があると指摘される（高橋，2012）。発達障がいのある学生には，その特性の一つとして，視覚的に整理されている環境や，やることが明

確な指示といった、構造化された場的・人的環境のもとでは、判断や行動がしやすくなる傾向がある（高橋，2012）。それに対し大学は、時間割作成や空き時間の過ごし方など、様々なことを自由に決められる反面（世界思想社教学社，2010），具体的にどのように振る舞えば良いのかの明確な指示を得にくい環境といえる。したがって、大学環境と発達障がい特性との相性は決して良いとはいえないが、近年、発達障がい（診断書有）および発達障がい（診断書無・配慮有）の学生数はますます増加している（日本学生支援機構，2017）。その為、発達障がい特性を強く有する学生への支援が一層求められる現状にあるが、発達障がい特性を強く有する学生の初期適応を支える為には、それらの学生が入学後に特にどのような事柄に戸惑いや困難を感じやすいのかを把握しておくことが重要となる。

ここで本研究では、「高校までの学校段階と大学との様々なギャップに対し、多くの大学1回生が入学後に強い戸惑いや困難を感じることを「大1コンフュージョン」と命名する。その上で、本研究では、(1) 大学1回生が戸惑いや困難を感じやすい具体的な場面・状況について、項目収集を行うこと、(2) 大1コンフュージョンの各項目について、大学1回生がどの程度戸惑いや困難を感じているのかを把握すること、(3) 大1コンフュージョンの各項目の中で、特に発達障がい特性と関連しやすい項目を把握することの3点を目的とする。なお、発達障がいの診断を有しても、あるいは発達障がい特性が強くても、必ずしも大学生活において特別な支援が必要というわけではない。発達障がい学生への支援を考える上では、その学生が支援を必要としているかどうかを直接調べ、必要としていれば支援につなげるアプローチが必要となる（高橋，2012）。そこで本研究では、発達障がいに関わる尺度として、発達障がい有する人が経験する困り感を測定する、ASD困り感質問紙とADHD困り感質問紙（共に、高橋，2012）を使用することとする。

Ⅱ 予備調査

1 目的

これまで先行文献において、高校と大学とのギャップに新入生が戸惑うことや、具体的にどういった場面・状況で戸惑うのかについては、ある程度言及されてきた（朝比奈，2010；専修大学出版企画委員会，2009；世界思想社教学社，2010；専修大学出版企画委員会，2009；高橋，2012など）。しかしながら、その内容は学習面でのギャップおよびそれへの対応策に焦点を当てたものが多く、学習面以外で大1コンフュージョンを生じさせる場面・状況についての言及は少ない。また、いずれの文献においても、学生たち本人から、実際にどのようなことに戸惑っているのかについて聞き取ったものは見られない。大1コンフュージョンを実際に経験するのは学生たちである以上、学生たち本人からも意見を聞くことで、幅広く場面・状況の収集ができると考えられる。

そこで予備調査では、大学1回生に、実際に大学に入学して以降、特に強く戸惑いや困難を感じた事柄について自由記述で回答してもらうこととする。それに加えて、大学の学生支援の部署で勤務する教員からも意見を聞き、これまでの相談の中で学生たちから直接聞いた大1コンフュージョンの例を複数挙げてもらうことから、項

目収集を行う。

2 方法

(1) 調査協力者および調査時期

2017年4月に入学した大学1回生31名（男性11名、女性20名）であった。調査時期は、2017年10月であった。

(2) 調査手続き

授業の感想用紙に、感想を記入する欄とは別に、「高校生活と大学生活は色々な面で大きく異なりますが、あなたが大学生活を始めた頃、どのようなことに一番戸惑いや困難を感じましたか？」という質問への回答欄を作成した。この質問に回答したくない場合は、無理に回答しなくても良いこと、この質問への回答が成績に反映されることは一切ないことを説明した上で、自由記述での回答を求めた。

3 結果と考察

自由記述の回答を整理した結果、「大学生活全般」の内容が21項目、「一人暮らし」の内容が6項目得られた。その上で、不適切な文言の修正と、さらに追加すべき項目について検討する為、大学の学生支援の部署で勤務する教員4名（うち3名は心理学、1名は特別支援教育が専門）で協議した。その結果、「大学生活全般」の内容が10項目増えて全31項目、「一人暮らし」の内容が2項目増えて全8項目となった（Table1, Table2）。

また「大学生活全般」31項目について、先の4名で協議しながら数個のまとまりとなるよう分類した。その結果、「情報取得困難」、「不明瞭さ（相談先・場所・空き時間の過ごし方）」、「友人関係・人間関係構築困難」、「時間割・授業履修の自己責任」、「授業上の困難」、「試験勉強・レポート作成上の困難」、「その他」の7側面が見出された。これらの中で、「時間割・授業履修の自己責任」、「授業上の困難」、「試験勉強・レポート作成上の困難」の3側面は、授業や学習に関することである一方、それ以外の4側面は学習面とは直接関係のない内容であるといえる。次の本調査では、大学1回生を対象に、「大学生活全般」31項目、「一人暮らし」8項目の計39項目について、どの程度戸惑いや困難を感じるかについて検討すると共に、ASD困り感、ADHD困り感との関連についても検討する。

Ⅲ 本調査

1 目的

予備調査において、計39項目の大1コンフュージョンの場面・状況が得られた。しかしまだ、大学1回生は特にどの項目に戸惑いや困難を感じやすいのかは明らかとされておらず、発達障がい困り感との関連も検討されていない。そこで本調査では、大学1回生を対象に、39項目について実際にどの程度困難を感じるのかを尋ねると共に、各項目とASD困り感、ADHD困り感との関連について検討する。

2 方法

（1）調査協力者および調査時期

2017年4月に入学した大学1回生259名（男性106名，女性153名，18～22歳，平均年齢18.87歳， $SD=.67$ ）であった。調査時期は，2017年12月であった。

（2）測定尺度と統計パッケージ

①大1コンフュージョン【大学生生活全般】項目群

予備調査で得られた31項目。調査の実施時期が12月で，大学1回生とはいえ既に大学生生活にずいぶん慣れてきている時期であると考えられた為，入学した当初のことについて回答するよう依頼した。「1. 全く困らなかった」～「5. とても困った」の5件法。

教示文：「あなたは大学に入学した当初，以下の場面や事柄にどの程度とまどったり，困ったりしましたか。それぞれあてはまるものをひとつずつお選びください。」

②大1コンフュージョン【一人暮らし】項目群

予備調査で得られた8項目。これら8項目については，一人暮らし経験者のみ（調査協力者259名のうち94名）を対象とし，一人暮らしを始めた当初のことについて回答するよう依頼した。「1. 全く困らなかった」～「5. とても困った」の5件法。

教示文：「大学に入学した当初から現在までに，実家から離れて生活したこと（一人暮らし）がある方におうかがいします。あなたは実家から離れて生活し始めた当初，以下の場面や事柄にどの程度とまどったり，困ったりしましたか。それぞれあてはまるものをひとつずつお選びください。」

③ADHD困り感質問紙（高橋，2012）

全24項目。「1. 困っていない」～「4. とても困っている」の4件法。

④ASD困り感質問紙（高橋，2012）

全25項目。「1. 困っていない」～「4. とても困っている」の4件法。

（3）調査手続き

本研究では，インターネット調査会社の（株）マクロミルに調査を依頼し，マクロミルに登録しているアンケートモニターを対象に調査を実施した。アンケートモニターが回答する調査画面の最初に，（1）回答の途中で気分が悪くなったり，これ以上答えたくないと感じられた場合は，途中で回答を止めても構わないこと，（2）回答内容は集団データとして扱う為，個人の回答内容は特定されないこと，（3）分析結果が学術研究以外の目的に使用されることは一切ないこと，（4）データはパスワードによって保護されたディスクで厳重に保管され，全調査終了後から5年後には破棄されることを明記した。これらを一読後，調査協力に同意する場合には，画面最後の「同意する」ボタンをクリックした上で，次ページに進んでもらうこととした。

3 結果と考察

（1）各項目の平均値

まず，大1コンフュージョン【大学生生活全般】（以下，【大学生生活全般】と略記）の31項目および大1コンフュージョン【一人暮らし】（以下，【一人暮らし】と略記）の8項目について，平均値を算出した。結果をTable1およびTable2に示す。これらは「1. 全く困らなかった」～「5. とても困った」の5件法で尋ねており，「3. どちらとも

いえない」が真ん中の値となる。

Table1を参照すると、【大学生活全般】の平均値の中で3を超えたのは、「17. 教養科目、専門科目、選択科目、必修科目、選択必修科目など、様々な授業カテゴリーを理解して、卒業に必要な単位取得計画を立てる必要があること」(3.03)、「25. 課題やレポートの提出が多いこと」(3.20)、「27. 採点済みの答案用紙が返却されないことが多く、次の勉強に活かさないこと」(3.08)、「29. 制服が無いため、毎日着ていく服装を自分で決める必要があること」(3.09)の4項目のみであった。それら以外の27項目は、3より低い値であり、どちらかといえば「困らなかった」方向を意味する結果であった。ただし、今回は12月に調査を行った為、調査協力者に大学入学当初のことを思い出して回答してもらう形式を取った。それゆえ、実際に入学直後の4月や5月に感じていた戸惑いや困難よりも、低く評定されている可能性が考えられる。

一方、Table2を参照すると、【一人暮らし】の平均値の中では、8項目中7項目が3を超えており、【大学生活全般】よりもやや高めの数値が示された。特に、項目番号2, 4, 8の家事、炊事、体調不良時の対応に関する3項目が3.37～3.45と比較的高めの数値となっていた。現状、大学において、これら一人暮らしで生じる困難に対応する為の教育や支援はほぼ行われていないと思われる。しかし、これらが大学1回生の大学生活における不適応の一因となり得るのであれば、今後一人暮らし生活をサポートする内容の講座を開講するといった何らかの支援策を検討していく必要がある。

次に、【大学生活全般】の31項目の平均値を、上位15項目（塗りつぶしで示す）と下位16項目（下線で示す）に分け、各々の内容について検討した。その結果、上位15項目に含まれたのは、「18. 教科書や参考書が無い授業があること」以外の、「時間割・授業履修の自己責任」、「授業上の困難」、「試験勉強・レポート作成上の困難」の3側面を表す13項目と、「その他」のスケジュール管理と毎日の服装選びを表す2項目であった。一方、下位16項目には、「情報取得困難」、「不明瞭さ（相談先・場所・空き時間の過ごし方）」、「友人関係・人間関係構築困難」の3側面を表す項目でほぼ占められていた。これらの結果から、多くの大学1回生にとって、戸惑いや困難を感じやすいのは、授業履修や学習面に関することである一方、学習面とは直接関係しない大学生活全般に対しては相対的に戸惑いや困難が低い結果が示されたといえる。

（2）大1コンフュージョンとASD困り感との関連

続けて、【大学生活全般】の全31項目とASD困り感との関連について、相関分析により検討した（Table1）。その結果、「時間割・授業履修の自己責任」を表す4項目は、.16～.18という絶対値で.2を切るほぼ無関連の値であったが、それ以外の27項目については.21～.45という弱～中程度の有意な正の関連を示した。この結果から、ASD困り感の強い人は、「時間割・授業履修の自己責任」以外の【大学生活全般】に関わる大1コンフュージョンを全般的に経験しやすいことが示されたといえる。

また、【一人暮らし】の全8項目とASD困り感との関連についても、相関分析により検討した（Table2）。その結果、項目番号3, 6, 7の諸経費の支払い、話し相手の不在、金銭管理の3項目は、.05～.18という絶対値で.2を切るほぼ無関連の値であった。

「大1コンフュージョン」の実際（第1報）

Table1 大1コンフュージョン項目群【大学生活全般】の平均値、ASD困り感、ADHD困り感との関連（N=259）

項 目	平均値 (5件法)	ASD困り感 との関連	ADHD困り感 との関連
<情報取得困難>			
1 ホームルームが無く、必要な情報を伝えてくれる担任の教師がいないこと	2.31	.35***	.34***
2 学内掲示板や学内webシステム、大学から送られてくるメール等で必要な情報を自分で取得するなど、自己管理が必要なこと	2.59	.21***	.28***
<不明瞭さ（相談先・場所・空き時間の過ごし方）>			
3 担任の教師がおらず、困った時に、誰に相談したら良いのか分かりにくいこと	2.44	.35***	.33***
4 相談窓口が多くて、どこに相談したら良いのか分かりにくいこと	2.41	.37***	.29***
5 教師がいる職員室が無いこと	2.31	.34***	.28***
6 授業を休んだ時に、どこに連絡すれば良いのか分かりにくいこと	2.53	.35***	.31***
7 自分の座席や教室が決まっていないこと	2.35	.30***	.29***
8 どこで昼食を取れば良いのかが決まっていないこと	2.42	.35***	.25***
9 授業と授業の間に長い空き時間ができる場合があること	2.62	.32***	.30***
10 昼休みの時間の過ごし方が決まっていないこと	2.32	.36***	.26***
<友人関係・人間関係構築困難>			
11 所属クラスが無く、友人を作る機会が少ないこと	2.58	.45***	.31***
12 飲み会に行った際の、コミュニケーションの取り方が分かりにくいこと	2.47	.31***	.23***
13 部活・サークル、アルバイトなどで、どう人間関係を作っていけば良いのか分かりにくいこと	2.59	.38***	.31***
<時間割・授業履修の自己責任>			
14 時間割を自分で決める必要があること	2.90	.16**	.12
15 シラバスを見て、自分で授業を選ぶ必要があること	2.90	.16*	.12
16 履修登録を自分で行う必要があること	2.91	.18**	.17**
17 教養科目、専門科目、選択科目、必修科目、選択必修科目など、様々な授業カテゴリーを理解して、卒業に必要な単位取得計画を立てる必要があること	3.03	.17**	.16*
<授業上の困難>			
18 教科書や参考書が無い授業があること	2.32	.31***	.24***
19 高校までと比較し、授業時間が長いこと	2.85	.24***	.32***
20 グループワーク、ディスカッション、発表等、様々な授業形態があること	2.85	.38***	.34***
21 パワーポイントを用いた授業では、どこが重要なポイントか分かりにくいこと	2.66	.35***	.39***
<試験勉強・レポート作成上の困難>			
22 授業の試験勉強をする際に、問題集や参考書等が無いこと	2.88	.28***	.30***
23 試験範囲が広くて、どこを勉強したら良いのか分かりにくいこと	2.98	.29***	.33***
24 試験問題が暗記問題だけではなく、論述形式の問題もあること	2.95	.25***	.29***
25 課題やレポートの提出が多いこと	3.20	.29***	.35***
26 「〇〇について思うことを書きなさい」など、はっきりとした正解のない問題への回答を求められることがあること	2.97	.36***	.37***
27 採点済みの答案用紙が返却されないことが多く、次の勉強に活かせないこと	3.08	.29***	.30***
<その他>			
28 学業、部活・サークル、アルバイトなど、様々なスケジュールを自分で管理する必要があること	2.64	.39***	.39***
29 制服が無いため、毎日着ていく服装を自分で決める必要があること	3.09	.27***	.24***
30 図書館の使用方法など、授業の内容以外に覚えることが多いこと	2.31	.35***	.29***
31 新入生歓迎（新歓）の時期に、様々な部活やサークルから勧誘されること	2.46	.28***	.24***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

※平均値、ASD困り感との関連、ADHD困り感との関連の結果とも、上位15項目は塗りつぶし、下位16項目は下線で示す。

Table2 大1コンフュージョン項目群【一人暮らし】の平均値、ASD困り感、ADHD困り感との関連（N=94）

項 目	平均値 (5件法)	ASD困り感 との関連	ADHD困り感 との関連
1 慣れない土地での生活に慣れること	3.22	.26*	.19
2 自分で食事を準備する必要があること	3.37	.22*	.28**
3 諸経費の支払い（ガス・電気・水道料金、家賃の支払い等）を自分で行う必要があること	2.99	.18	.20*
4 その他家事（掃除、片付け、洗濯等）を自分で行う必要があること	3.45	.33**	.39***
5 朝に自分1人で起きる必要があること	3.21	.21*	.38***
6 家に話し相手がないこと	3.20	.08	.12
7 金銭管理を自分で行う必要があること	3.15	.05	.19
8 体調不良になった時に、近くに助けてくれる人がいないこと	3.40	.23*	.30**

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

一方、それ以外の5項目は、.21～.33という弱～中程度の有意な正の関連を示した。この結果から、ASD困り感の強い人は、項目番号1, 2, 4, 5, 8の慣れない土地での生活に慣れること、家事、炊事、自分1人での起床、体調不良時の対応に関する戸惑いや困難を感じやすいことが示されたといえる。

次に、【大学生活全般】の31項目とASD困り感との相関係数を、上位15項目（塗りつぶしで示す）と下位16項目（下線で示す）に分け、各々の内容について検討した。その結果、上位15項目には、「情報取得困難」、「不明瞭さ（相談先・場所・空き時間の過ごし方）」、「友人関係・人間関係構築困難」の3側面を表す項目が10項目と多数を占めた。一方、下位16項目には、「時間割・授業履修の自己責任」、「授業上の困難」、「試験勉強・レポート作成上の困難」の3側面を表す項目が11項目と多数を占めた。この結果は、先の（1）の平均値の結果とは逆に近いものであった。つまり、ASD困り感の強い人は、学習面とは直接関係しない大学生活全般に対して戸惑いや困難を感じやすい一方、授業履修や学習面に関することには相対的に戸惑いや困難が低い結果が示されたといえる。

ただし、授業履修や学習面に関することの中で、項目番号20, 21, 26の3項目については、上位15項目に含まれていた。ASDを有する学生をはじめコミュニケーションを苦手とする学生が、アクティブラーニング型授業に参加する際、困難を伴いやすいことが指摘されている（原田・枝廣, 2017；日本学生支援機構, 2015）。その為、グループワークや発表等の状況を表す項目番号20とASD困り感とが相対的に強めの関連を示すのは、妥当な結果といえよう。また、項目番号21や26といった、具体的かつ明確な指示のない状況は、ASDを有する学生にとっては苦手としやすいことから、項目番号21, 26とASD困り感とが相対的に強めの関連を示したのも納得のいく結果といえる。

（3）大1コンフュージョンとADHD困り感との関連

【大学生活全般】の全31項目とADHD困り感との関連についても、相関分析により検討した（Table1）。その結果、ASD困り感との関連結果と同様、「時間割・授業履修の自己責任」を表す4項目は、.12～.17という絶対値で.2を切るほぼ無関連の値であったが、それ以外の27項目については.23～.39という弱～中程度の有意な正の関連を示した。この結果から、ADHD困り感の強い人も、「時間割・授業履修の自己責任」以外の【大学生活全般】に関わる大1コンフュージョンを全般的に経験しやすいことが示されたといえる。

また、【一人暮らし】の全8項目とADHD困り感との関連についても、相関分析により検討した（Table2）。その結果、項目番号1, 6, 7の慣れない土地での生活に慣れること、話し相手の不在、金銭管理に関する3項目は、.12～.19という絶対値で.2を切るほぼ無関連の値であった。一方、それ以外の5項目は、.20～.39という弱～中程度の有意な正の関連を示した。この結果から、ADHD困り感の強い人は、項目番号2, 3, 4, 5, 8の炊事、家事、諸経費の支払い、炊事、自分1人での起床、体調不良時の対応に関する戸惑いや困難を感じやすいことが示されたといえる。

次に、【大学生活全般】の31項目とADHD困り感との相関係数を、上位15項目（塗り

つづしで示す）と下位16項目（下線で示す）に分け、各々の内容について検討した。その結果、上位15項目には、「情報取得困難」、「不明瞭さ（相談先・場所・空き時間の過ごし方）」、「友人関係・人間関係構築困難」の3側面を表す項目が6項目、「時間割・授業履修の自己責任」、「授業上の困難」、「試験勉強・レポート作成上の困難」の3側面を表す項目が8項目および「その他」の1項目が含まれていた。一方、下位16項目には、「情報取得困難」、「不明瞭さ（相談先・場所・空き時間の過ごし方）」、「友人関係・人間関係構築困難」の3側面を表す項目が7項目、「時間割・授業履修の自己責任」、「授業上の困難」、「試験勉強・レポート作成上の困難」の3側面を表す項目が6項目および「その他」の3項目が含まれていた。この結果は、先の平均値の結果ともASD困り感との関連結果とも異なるものであった。つまり、ADHD困り感の強い人が戸惑いや困難を感じやすいのは、必ずしも授業履修や学習面に関すること、もしくは学習面とは直接関係しない大学生生活全般に関することのどちらかに偏るわけではないことが示されたといえる。

Ⅳ 総合考察

1 大1コンフュージョンの内容について

本研究ではまず、大1コンフュージョンの具体的な場面・状況を幅広く収集することを目的に、予備調査を行った。その結果、【大学生生活全般】の31項目および【一人暮らし】の8項目の計39項目の場面・状況が見出された。これまで大学1回生の学生たち本人から、これらの場面・状況について直接聞き取る調査は見られなかった。それに対し、本研究では学生たちの自由記述から、場面・状況を得ている点で、より実態に即した大1コンフュージョンの項目が収集できたと考えられる。またこれまで、入学前教育、リメディアル教育、初年次教育を始め、大学における高大接続の取り組みは、学生の学習面の適応を促すものが多い。それに対し、予備調査の結果から、大学1回生の戸惑いや困難は、学習面のみならず、多様な場面・状況において感じられている実態が明らかになったといえる。これらの結果は、今後改めて大学1回生の初期適応を促す方策を考える上で、意義ある資料といえよう。

ただし、予備調査での調査協力者は31名と少数である上に、同一大学の学生からの回答に限定されている。その為、さらに幅広い大学の大学1回生を対象に、より多くの人数から自由記述の回答を得ることで、さらに多様な大1コンフュージョンの項目が得られる可能性は高い。その点については、今後の課題といえる。

2 大1コンフュージョンの平均値、発達障がい困り感との関連について

本調査の結果から、大学1回生は【大学生生活全般】の中で、授業履修や学習面に対して相対的に戸惑いや困難が高く、学習面以外の大学生生活全般に対しては相対的に戸惑いや困難が低い結果が示された。近年の初年次教育では主にアカデミック・リテラシーに類する教育が実施されるなど（文部科学省，2017；吉岡，2013）、現在多くの大学が新入生の学習面のサポートに力を入れている。本調査の平均値の結果は、現状の大学のそのような取組が、多くの学生が抱く学習面への支援ニーズに適切に応じたものであることを示唆するものといえよう。

しかし一方、ASD困り感の強い学生は、授業履修や学習面よりも、それ以外の大学生活全般に対して、より戸惑いや困難を感じやすいという結果が示された。ASD困り感質問紙は、ASDのある人が経験する困り感をもとに作成されている（高橋，2012）。その為、ASD困り感ASD特性そのものとはいえないものの、ASD特性と密接に関わる概念であり、本調査の結果はASD特性を強く有する学生においても概ね当てはまるものと考えられる。発達障がいのある学生や、診断は無くても発達障がい特性の強い学生は年々増加しており（日本学生支援機構，2017）、ASD特性を強く有する学生も今後ますます増加すると予測される。その為、そのような学生たちへの支援となるよう、今後初年次教育の内容に、学習面以外のことに対する戸惑いや困難をサポートする内容も含めることは、有益なことと考えられる。加えて、それは本来、発達障がいの有無にかかわらず全ての学生にとって意義のあるものである（高橋，2012）。学生たちが大1コンフュージョンへの対応を学び、大1コンフュージョンに由来する不適応を予防もしくは軽減できるよう、初年次教育での授業も含め、多くの学生たちが支援を得られる機会の増加が望まれる。

3 今後の課題

大学新入生の高校から大学への移行をサポートする上では、大学入学後の支援も重要であるが、入学前の段階で新入生自身が大学生活で生じる困難さに対し、あらかじめ予防的に準備をしておくことも重要であろう。その為には、第1コンフュージョンの存在そのものや、それに起因して大学1回生が不適応に陥る可能性があることなどについての社会的認知度をより高めていく必要がある。特に、大学進学者に入学前に大1コンフュージョンへの準備を促せるよう、高校の教職員に理解を深めてもらうことは意義あることといえる。今後は、そのような高校の教職員をはじめ、大学受験生やその保護者にも大1コンフュージョンの認知度が高まるよう、普及啓発活動を精力的に行っていく必要がある。

また、大1コンフュージョンの感じやすさが、実際にその後の大学生活での不適応をもたらすのかについては、まだ十分には検討されていない。今後は、縦断研究を行いながら、実証的な検討を行っていく必要があるであろう。

参考・引用文献

- 朝比奈 なを（2010）．高大接続の“現実” “学力の交差点”からのメッセージ 学事出版
- 濱名 篤（2006）．中央教育審議会大学分科会大学教育部会初年次教育の現状と課題～“移行”問題を中心に～ Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/015/gijiroku/07012325/003.pdf（2018年1月9日）
- 原田 新・枝廣 和憲（2017）．大学のアクティブラーニング型授業に対応したユニバーサルデザイン環境に関する一考察 岡山大学教師教育開発センター紀要，7，137-146.
- 文部科学省（2017）．平成27年度の大学における教育内容等の改革状況について（概要） Retrieved from http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/

- icsFiles/afieldfile/2017/12/13/1398426_1.pdf（2018年1月9日）
- 日本学生支援機構（2015）．教職員のための障害学生修学支援ガイド（平成26年度改定版） 日本学生支援機構
- 日本学生支援機構（2017）．平成 28 年度（2016 年度）大学，短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書 日本学生支援機構 Retrieved from http://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu_shien/chosa_kenkyu/chosa/_icsFiles/afieldfile/2017/11/09/2016report3.pdf（2018年1月9日）
- 世界思想社編集部（2015）．大学生 学びのハンドブック [3訂版] 世界思想社
- 世界思想社教学社（2010）．大学生になる前に知っておきたいこと 教学社
- 専修大学出版企画委員会（2009）．改訂版 知のツールボックス 専修大学出版局
- 高橋 知音（2012）．発達障害のある大学生のキャンパスライフサポートブック 学研教育出版
- 東京都教育委員会（2004）．東京都教育ビジョン Retrieved from http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/buka/soumu/vision/saisyu/honbun_chuui.htm（2018年1月9日）
- 渡邊 賢二・堤 貴之（2017）．大学新入生の友人関係の変化と適応感との関連：短期縦断調査より 皇學館大学紀要, 55, 1-17.
- 吉岡 路（2013）．学習者を主体とした高大接続教育の課題と展望 立命館高等教育研究, 13, 43-60.

Study of “Confusion after the entrance to Higher Education” I
Investigation on “Confusion after the entrance to Higher Education”

Shin HARADA *1, Kosuke IKETANI *1, Megumi MATSUI *1, Naoto MOCHIZUKI *1

Keywords: confusion after the entrance to higher education, support for students with developmental disorders in higher education, articulation between high schools and universities, first year experience

*1 Institute for education and student services, Okayama University

*2 Health and Counseling Center, Osaka University
